



Short ショートコメント

★★★★★

欲望の翼 デジタルリマスター版 (阿飛正傳／Days of Being Wild)

1990年／香港映画

配給：ハーフ／95分

2023（令和5）年12月29日鑑賞

シネ・リーブル梅田

Data 2023-153

監督・脚本：王家衛（ウォン・カーウァイ）
撮影監督：クリストファー・ドイル
出演：張國榮（レスリー・チャン）／張曼玉（マギー・チャン）／劉嘉玲（カリーナ・ラウ）

みどころ

1980年代に“中国ニューウェーブ”を巻き起こした張芸謀（チャン・イモウ）や陳凱歌（チェン・カイコー）あれば、香港には王家衛（ウォン・カーウァイ）あり。中国に鞏俐（コン・リー）や章子怡（チャン・ツイイー）あれば、香港には張國榮（レスリー・チャン）や張曼玉（マギー・チャン）あり。

人口は100分の1でも、名監督、スターでは香港は中国（本土）に負けてはいない。その代表が、王家衛監督32歳の時の本作だ。主演は若き日の張國榮、梁朝偉（トニー・レオン）、劉德華（アンディ・ラウ）、張曼玉、劉嘉玲（カリーナ・ラウ）らだから、その瑞々しさは日本の1960年代の日活における、吉永小百合、浜田光夫、高橋英樹、和泉雅子ら青春スターたちと同じだ。

“一国二制度”が形骸化してしまった現在の香港では考えられない、1980年代の自由な香港に見る青春スターたちの“輝き”を「ウォン・カーウァイザ・ビギニング」と題された4K版で再度しっかり目に焼き付けたい。

————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * ————— * —————

◆『閃光のごとき衝撃と陶酔』——ウォン・カーウァイ監督初期の傑作が4Kレストアでスクリーンに蘇る。そんな謳い文句の中、「制作30周年記念公開」「ウォン・カーウァイザ・ビギニング」として、王家衛（ウォン・カーウァイ）監督の『欲望の翼 デジタルリマスター版』が公開された。私が同作をはじめて観たのは2004年6月30日だから、約20年前だ。

私が中国映画にハマったのは、2004年6月19日～7月30日に大阪市西区の映画館シネ・ヌーヴォで開催された「中国映画の全貌2004」。そこでは、計44プログラム48作品を上映したので、私はフリー券2万円を買い求めて、約30作品を鑑賞することができた。

◆そこで見たウォン・カーウァイ監督作品は、本作の他、『楽園の瑕』（94年）（『シネマ5』231頁）と『ブエノスアイレス』（97年）（『シネマ5』234頁）の2本だが、これら3作品

のインパクトは強烈だった。その後、香港映画界を牽引することになった、張國榮（レスリー・チャン）をはじめとする 6 人の俳優（男女）たちの若き日の姿は瑞々しいが、それ以上に同作を監督した時のウォン・カーウアイは 32 歳だったというから恐れ入る。

本作に代表されるウォン・カーウアイ監督や、レスリー・チャン、張曼玉（マギー・チャン）、劉嘉玲（カリーナ・ラウ）たちの若手スターが活躍する 1980 年代の香港映画界の姿は、まさに私の中学高校時代に体験した、吉永小百合、浜田光夫、高橋英樹、和泉雅子らの若手人気スターが活躍した 1960 年代の日活の映画界の姿と完全にダブっている。

『シネマ 5』の本作の評論の中で、私はマギー・チャンの美しさを絶賛するとともに、彼女は「かつての大映の看板女優、藤村志保に似ている」と書いたが、20 年ぶりに再度見てみると、それ以上に吉永小百合にそっくり・・・？

◆『シネマ 5』における本作の評論の「見どころ」で、私は「しかし思われぶりなラストはどうも・・・？」と書いた。また、本文でもく最後のちょい役（？）の梁朝偉（トニー・レオン）> の小見出で「『6人の大スターの競演』の最後は、梁朝偉だが、これはちょっといただけない。」と書いた。これは、本作はもともと前後 2 部作でつくる予定だったが、ロードショー当日を迎えて完成したのは第 1 部だけで、予算も既に 2 作分をオーバーしていたため。したがって、この梁朝偉の 1 シーンは第 2 部の予告的な意味で挿入されたものの、第 2 部は完成していないということらしい。つまり、6 年後の香港を舞台とした第 2 部を完成することを予定した本作ラストにトニー・レオンがギャンブラーとして登場した 1 シーンはその予告だったわけだが、そのトニー・レオン扮するギャンブラーが主人公として登場する映画は結局製作されず、公開されなかつたわけだ。なお、ウォン・カーウアイ監督の心の中では、その第 2 部として作られた映画が『樂園の瑕』だが、その舞台は中国古代の砂漠地帯となっているから、一体これは・・・？

◆本作はデジタルリマスター版だが、新たにパンフレットが作成され、販売されている。そして、そこにはウォン・カーウアイ監督×暉峻創三のインタビュー「飛ひ続ける鳥のように」（1991 年東京国際映画祭で来日した際のインタビュー）があり、その中で第 2 部のことについても触れている。それによると、「60 年代を舞台とした作品ということで、それにふさわしい撮影場所を見つけるのが大変だったのと、オールスター映画で役者たちのスケジュール調整に手間取ったのとで大幅に遅れ、結局、クリスマスのロードショー時期までには第一部しか仕上げられなかつた。第二部用にほんの少し撮影した部分もあるけど、大部分はこれから。第一部を観た一般観客の反応が良くないので、脚本も変えようと考えている・・・。」ということだ。もっとも、このインタビューは『香港電影世界』（暉峻創三著・1997 年）からの転載だから、2023 年の今、『欲望の翼』第二部製作の見込みは全くなし・・・？

2024（令和 6）年 1 月 10 日記